



第四十一回 間違った聖地巡礼と
『この世界の片隅の職業としての小説家(仮)』

考え



「NON」と
言えるこの世界

弦楽器イルカ ⇔ 友人



第四十一回 間違った聖地巡礼と『この世界の片隅の職業としての小説家（仮）』～GからUへ～

今さらだけど『この世界の片隅に』が良かったって、俺のまわりでは結構知らない人も多かったから書いておこう。

とはいえ既にいろんな熱いレビューあるし、俺ごときウマシカだから他と重複しなそうな部分だけ書くよ。ちなみに裏テーマは流行語GOね、今回。

まずこの映画を取り巻く状況があえて、神ってる。まず、あえて。

例えば、「足りない資金をネットで集めて、広島や呉で支える会ができて、6年かけてやっと公開」って紹介がよくされる。

つまりこの世界の片隅でたくさんの人々に支えられながら、監督が自腹切りすぎて家族の食費削っても、6年の間に震災があっても、主演女優が改名しちゃってあの業界の片隅に追いやられて民放で扱いつらい現状が続いても、それら全てを引き受けて「ありがとう」ってあの声で言われたら、そりゃみんなこの映画は自分が見つけたんだって応援したくなるよ。

この作品を取り巻くこの状況、まさにこの広島でこの今年だからこそやっぱこの「神ってる」でまとめていいんじゃないかねえ、コノコノ！

特に俺が一番すごいと思ったのは、劇中で最も重要なセリフが俺の耳にはうまく聞き取れなかったってとこ。

「欲しがりません勝つまでは」って時代に、一億総玉砕に慣らされて、どんだけ追い込まれても「よかったね」で誤魔化してきたのに、失ったモンはもう戻って来ないのに、本名も名乗れないのに、これじゃあんまりにも浮かばれんじゃないか！って激昂してる場面だから、声に感情入りすぎて「え何て言ったの？」って少し残念ながらも痛く納得した。もちろん自分の耳のせいか、もしかしたら映画館の音響かもしれないから、あくまでウマシカ視点のすごさだけだね。

ただ現実には「はいここが最もいいセリフです」って俯瞰で絵コンテ切る誰かはいない。それに感情入りすぎた魂の言葉はえてして自分に向かって言っていたりするから、他人が聞き取れなくても当たり前だし、「そこもう一回」ってこっちからお願いするのもバカすぎる。けどそれがリアルじゃん。

もちろんセリフをちゃんと確認したいし、内容も濃すぎて一回じゃ入りきらないから、すぐ原作買って喜んで読んだけど。でも原作と映画じゃ核心のセリフが違ってた。

演劇だとボソッと聞こえない芝居とか意図的にあるけど、クライマックスのセリフが聞き取れないってのは斬新だったし、覚悟のいる演出だって思ったよ。とにかくそんくらいリアルでよかった。

ちなみに原作ももちろん良いんだけど、映画はかなり強かに脚色されてて、柔らかい着色や演技も見事で、戦時中の炊飯じゃないけど内容が何倍にも濃密かつ膨らんで、まあよく出来てた。

こっからちょっとネタバレだけど、主人公の眼前で炸裂する高角砲弾の爆煙が赤、オレンジ、黄色、青の4色に染まり「今ここに絵の具があれば！」って感じてしまう業の深い芸術家みたいな場面とか、あるいは、離れて暮らすお兄ちゃんが軍艦好きでいろいろ教えてくれて、幼い妹も自分が見た軍艦をお兄ちゃんに教えてあげたくて港に近づこうとして、でも軍艦は兵器でありそこは紛れもなく戦地の真ただ中だから、「のんびり子供」の夢が入り込む余地なんて全くないという展開とか、資料に基づいた描写にも説得力があった。

蛇足だけど、「戦争映画だから戦争の悲劇とか戦闘シーンとか戦史とか大きな物語が観たい」って人には向かないと思う。期せず、前に比較した『ガンダム』と『マクロス』、『巨人の星』と『タッチ』、『火垂るの墓』と『この世界の～』の図式にもあてはまるって、これもあくまでウマシカ視点で思った。

つまり、「そもそも〇〇映画とかくくるのもどうかな」と思っていたり、戦争やスポーツを題材に「大きな物語」ではなく「大いなる日常」を描いてほしい人向けの作品だね、きっと。

ちなみに俺が観た映画館なんだけど、決して悪く思っていないからちょっとボヤかして書くと、たまたま聖地の映画館で観ることができた。

さすがにお膝元だし土日だから混むかなって軽く下見したら、そこそこ広いロビーの真ん中にサービスカウンターみたいな古い窓口があって。そこにたぶん普段着っぽいおばちゃんが二人座ってて。一人は携帯で通話する声がホールに響いてて。

隣にある昭和っぽい機械のポップコーンは200円で。「混みますか？」って聞いたら「混んでも満席になることはまずない」って。「自由席だから、普段は上映始まる時に来てお金払うんで、先にお金払ってもいいけど指定席じゃないから。今買っても指定席はないから」って念押しされた後、「んじゃ、来るときこのレシート見せたら入場できるから」って。

あ、券ないんだっていう新鮮さね。あともう一人おじいちゃんがいるんだけど、この映画館の真ん中に実家を彷彿とさせる造り、やっぱ名物らしい。

そもそも4階建てビルの最上階に映画館があって。気付いたらいつのまにか限りなくドンキに寄ってた感じのせわしない商店が地下と2階に入ってた。決して都会とは呼べないながら街の中心で。ビルの名前は某ポポロで。3階は古いゲーセンと百均で。1階は新しいパン屋と、チェーンのカフェと服屋のテナントが入っててそこそこきれいだし、割とお客さんもいる。

映画を観終わったら夜で、駐車場まで歩く道すがら川沿いではゼロ戦を模したイルミネーションがやたら派手に感じた。そりゃ確かにご当地だし、納得なんだけど。

ただこの映画を観た後でさ。風情があるほどさびれてるワケでもなく、かといってぎゅうぎゅうに栄えてるワケでもない地方都市の真ん中で、チカチカのゼロ戦が否応なく目に飛び込んでくる感じとか、「さっきまでの柔らかな街並みが、現代人の手にかかれば、なんということでしょう」ってほぼほぼ微妙な映画体験におとしめられたけど、いやむしろ、強い生命力はこの手の

雑種っぽさにこそ宿るのがリアルだって、総じて感慨深かったよ。

んで、今回はもう一つ書きたいテーマがあって。それが村上春樹のエッセイについてなんだけど。これもよかった。いろいろ考えたけど、二つ書かせて。

出版社の依頼ではなく、ただ好きに書いた長編が評価され売れ続けるって、他の作家にない特殊な偉業だと俺も思うけど。

でも春樹は自分の作品が必ず一定数の人を怒らせるって書いてる。

なんで怒るのか。それは理解できない疎外感が大きいだろう。みんな笑ってるギャグに自分は面白くないって怒るのと一緒だ。センスが理解できないから。

じゃなぜ理解できないかっていうと、理解できるような説明がないからだ。

ここ、『イニシエーション・ラブ』で例えるとすごくわかりやすい。

俺の妄想ではあのA面はたぶん春樹風の青春小説を意識して若干皮肉ってるとも思う。何か事情がありそうなんだけどはっきりとは示されない、陰を感じさせるA面の裏事情を、B面で明かすって内容だよな。

俺は前にも、「B面はやボな手品のタネ明かしと一緒につまんないから、A面だけでいい」って、たぶん誰もそう思わないだろうって感想をわかってて書いた。「だってB面なかったらこの作品は成立しないでしょ」ってツッコミは想像に難くない。

でも、純文学とはつまりB面を書かない『イニシエーション・ラブ』であり、昔からそれで成立してるはずだ。今さら『藪の中』を引用するまでもない。純文学に真相や謎解きは必要ない。B面のことを純文学では昔から「行間」って呼んでる。手品のタネを明かさずに、どんだけ読者に行間を想像させられるかが、純文学作家という手品師たちの腕の見せ所だ。

もちろんB面まできっちり書くタネ明かし型エンタメ小説が好みの作家や読者もいて、そこはエンタメも純文学もお互い尊重でいいはずなのに、「小説とはかくあるべし」って思い込みが過ぎて相手を攻撃したり不幸が生じるのが昨今のSNS事情だから、各自気を付けるようにね。

んでもう一つ。

春樹がモラルについて書いてるのを読んで俺なりに解釈したのは、春樹にとって長編小説とは、彼なりのモラルを伝えるための器だったのかなって。だとしたらそれはとても成功したと思うし、有効な手段かつ大事な動機だと思う。もちろん書く理由はそれが全てじゃないにしても、なんかわかってるようでよくわかってなかった。改めて腑に落ちた。

そこひるがえって不遜けどウマシカな俺自身についても考えた。

自分の中で人物を育てるような気持ちで長編を書く。今の俺にそれができるだろうか？

恥ずかしいけど少し前まで、既に俺の中には先客がいて、20歳の頃までの自分がずっと取り残されてた。だからそこに対してはいくつかの物語で俺なりの答えを出した。

そっから次に新しい誰かを自分の中で育てられるのかしばらく考えたけど、育てる時間や手段がまどろっこしいと思った。

モラルを伝えるための手段として、今は物語よりもUへの手紙の方が有効かつ速いと判断して、まだここでこうやってる。この『ウマシカ』は最終的に俯瞰したとき、一つのメタ物語みたいになればいいと思って書いてる。

あるいは俺が今本当に読みたい長編小説は、首に傷のある若者が政治家になるために奮闘して、社会の壁にぶつかりながら少しずつ政策を実現してく物語だったりするが、たぶん俺には書けない。駆け付け警護とか現場の作業員が主人公ならそれでもいいけど、知識も意欲も足りない。

そういえば春樹の長編と『この世界の〜』にはたぶん共通点があって、それは基本的にファンタジーであるってとこだ。

『この世界の〜』は、導入とラストにファンタジーが入ってて、それが真ん中のリアリズムをサンドしてる。誰の目にも明らかに「これは虚構です」ってマーキングをわざとしてる。たぶんこれは、作者と読者の負担を軽くさせるって意味が一つあると思うよ。

まだ結論は出てないけど、そういうことを考えた師走。

今回はこういう感じ。どうかな？



考えるウマシカ～第四十一回 間違った聖地巡礼と『この世界の片隅の職業と
しての小説家（仮）』～

<http://p.booklog.jp/book/111822>

著者：弦楽器イルカ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gengakkiiruka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/111822>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト